「神奈川台石崎楼上十五景一望之図」横浜開港資料館所蔵

はじめに

東海道神奈川宿

東海道五十三次のひとつ神奈川宿。この地名が県の名前や区の名前の由来です。またここが、近代都市横浜の母体でもありました。しかし、関東大震災と第二次世界大戦によって、歴史的遺産の多くを失いました。そのため地元の人でさえ、東海道がどこを通り、宿場町の様子がどのようであったかを知る人は少なくなりました。

現在、宿場町当時のものはほとんど失われてはいますが、台町の坂などに、当時の面影を見つけることができます。

絵図にみる神奈川宿

神奈川宿は日本橋を出て三番目の宿場町。下図は江戸後期・幕府の道中奉行所が作った『東海道分間延絵図』です。右側が江戸方向(＝東)、左側が京都方向(＝西)となります。図の中央には滝ノ橋が描かれ、この橋の東側に神奈川(石井)本陣、西側に青木(鈴木)本陣が見えています。右端は江戸側からの入口で、長延寺が描かれています。左側の街道が折れまがったあたりが台町。台町の東側には神奈川湊が描かれています。

この神奈川が一躍有名になったのは、安政元年(一八五四)に日米和親条約(神奈川条約)が締結されてからです。その四年後に結ばれた日米修好通商条約では神奈川が開港場に決められましたが、後に横浜に変更されました。開港当時、この図に見られる多くの寺が、諸外国の領事館などに充てられました。「神奈川宿歴史の道」のルートはほぼこの範囲を対象としています。

「東海道分間延絵図 神奈川」逓信総合博物館所蔵